

第38回（2022年度）マツダ財団研究助成一覧 – 青少年健全育成関係 –

受付番号	研究題目および研究概要	研究代表者 (*役職は応募時)	研究期間 (年)	助成金額 (万円)
2	ヤングケアラーが生まれるメカニズムと支援策に関する研究	宮本 恭子 島根大学 法文学部 教授	2	80
	家事や家族の介護を日常的に行っている子どもを「ヤングケアラー」という。近年、このヤングケアラーへの関心が高まっている。ヤングケアラー対策の中で、発生の予防を考えることは、最も重要かつ意義深いものだが、家庭内のケア状況は見えにくく、子どもからSOSを出すことも難しいため、予防的アプローチは決して容易ではない。そこで本研究では、子どもが「潜在的な介護力」に組み込まれて、孤立することのないよう、ヤングケアラーの発生要因・機序を解明し、予防的対策を検討することを目標とする。			
10	対話から生まれる若者たちの居場所と自分らしい将来のあり方	山本 真実 浜松医科大学 医学部 准教授	2	80
	Society5.0時代の到来、感染症の世界的流行など、社会の在り方や人々の価値が急激に変化する時代となった。若者たちは、多様な価値観を尊重し、自分らしい将来を見つけていくが、そのためには同世代の人々と集い、話し合う居場所が必要となる。本研究は、自主的・継続的に若者達が集い語り合う活動を取り上げ、若者たちが自らの力でつくる居場所の特性と、その居場所で彼らが見つける自分らしい将来について、やりとりや関係性、相手への姿勢といった「対話」の視点から明らかにする。			
14	豪雨災害時に外国籍住民を情報弱者にしないための市民参加型防災学習実践 ～LEGOを用いた対話活動と共助力向上に着目して～	小口 悠紀子 広島大学大学院 人間社会科学研究科 准教授	2	80
	本研究では、平成30年7月豪雨で明らかになった外国籍住民の避難行動をもとに、従来の知識伝授型の防災教育の限界を指摘する。その解決策として「リスク・コミュニケーション」の創出を目指した市民参加型の防災学習の必要性を主張する。具体的には、LEGO®を用いて日本人と外国籍住民の親子がともに参加・交流できる実践を行い、対話や気づきを明らかにする。さらに、日本語教育や多文化共生のまちづくりという観点から、「共助力」の向上を目指した今後の防災学習のあるべき姿を提言する。			
22	社会の「あるべき生き方」に沿えない若者のひきこもりと、アイデンティティの再構築による回復	日原 尚吾 松山大学 経営学部 准教授	1	80
	ひきこもりは、社会との接触を断ち、孤立する現象を指す。ひきこもりの若者は、社会が期待する「あるべき生き方」に沿うことができないために、社会で居場所を失い、自分らしい生き方を構築できない状態に陥っている。本研究は、「社会の中で何をして生きるのか」という自覚であるアイデンティティの観点から、ひきこもりの若者が、社会の「あるべき生き方」から逸脱してひきこもりに至る過程、その後、「あるべき生き方」とは別の形で主体性を発揮し、社会で認められる生き方を再び模索する過程を明らかにする。			
26	ひとり親家庭を対象とした自然体験活動が参加者の自己肯定感および保護者の子育てレジリエンスに及ぼす影響	徳田 真彦 大阪体育大学 体育学部 講師	2	80
	本研究は、貧困を原因とする体験格差や教育格差の解決に向けたアプローチを行うため、一般社団法人日本アウトドアネットワークが実施している「ひとり親家庭支援事業」を取り上げ、ひとり親家庭を対象とした自然体験活動の効果を参加者および保護者の両面から明らかにする。また、事業運営者や参加家庭・不参加家庭の保護者へ支援事業に関する実態・ニーズ調査を行い、参加する障壁となる課題を明らかにするとともに、その解決策を検討する。			
合 計 5件			助成金総額 400万円	